特別編

九州の逸品
KYUSYU NO IPPIN

FILE No.66

九州の「地域ブランド」を
ご紹介致します。

矢方牧場
矢方 盛士（やかた せいじ）さん

Profile：1960年生まれ、63歳。大分県玖珠郡九重町で繁殖農家「矢方牧場」を営む。第46回大分県農業賞の企業的農業部門 個人経営の部 最優秀賞受賞。大分県豊後牛生産者組織連絡協議会 会長も務める。

牛（ぎゅう）

大分県・九重町

おおいた豊後（ぶんご）

はじめに

大分の自然で育った「おおいた豊後牛」は、大分県内で最も長く肥育された黒毛和種の牛肉で、美しい霜降りと柔らかさが特徴。さらに「おおいた豊後牛」のリーディングブランドとして、おいしさにこだわった農場で育てられた品質4等級以上のものを選んだ「おおいた和牛」がある。今回は、ブランド牛の原点となる子牛を育てる繁殖農家を訪ねた。

九重の飯田高原にある繁殖農家を訪ねて

「おうい、おうい」

早朝、まだ空が暗い中、矢方さんの牛を呼ぶ声が牛舎に響く。母牛たちがのっそり寄ってきて、朝ご飯の牧草をおいしそうに食む。矢方さんの牧場がある大分県九重町の飯田高原は標高が高く、11月頃から朝は氷点下の冷え込みになる。

矢方牧場で生まれた子牛は10日～2週間くらい母牛と一緒に過ごす。栄養がたっぷり詰まった初乳は子牛の免疫力を向上させる役割がある

肉牛を育てる農家には大きく2つに分けて「繁殖農家」と「肥育農家」がある。母牛を飼育して子牛を産ませ、その子牛を売るまでが「繁殖農家」で、子牛をセリ市場で買い付けてお肉用に太らせるまでが「肥育農家」。矢方さんは「繁殖農家」で、母牛や子牛のお世話をしている。

実はあまり知られていないが、大分県は肉用子牛（黒毛和牛）の一大生産地。大分県のセリ市場に出された子牛は、肥育農家が買い付け、20カ月前後かけて肉用牛にする。肥育地域がブランド牛の名前になるので、大分県の繁殖農家で育てられた子牛が別の地域のブランド牛になることも珍しくはない（※）。とはいえ、大分生まれの子牛のほとんどは大分県、広く九州県下の肥育農家で育てられる。

（※）但馬牛、神戸ビーフなど産地の規定が厳格なブランド牛もある

矢方牧場のヒストリー 32歳で牛飼いを志す

矢方さんが経営する「矢方牧場」では、母牛を約90頭飼育し、子牛を年間約70頭市場へ出荷。繁殖農家の理想のサイクルである1年1産をほぼ達成している。

大分県九重町の飯田高原は昔、高原キャベツ栽培が盛んで、矢方さんの家も高原キャベツ農家だった。「父が趣味で品評会用の牛を5頭飼っていて、小さい頃から牛の世話をよくしていました」

両親が夜中にキャベツを収穫している姿を見て育ち、中学の頃はキャベツの収穫を毎晩手伝った。「自分が働いて少しでも家の手助けになれば」と、農業高校を卒業後は地元で土木関係の仕事に就く。最初はバブル景気で給料も良かったと言うが、その後バブルが崩壊。多くの公共工事が削減され、このまま土木

人に馴れた様子の子牛。母牛から離された子牛は、しばらくは人が粉ミルクを与える

1.2.好奇心旺盛でカメラを向けると寄ってくる子牛たち。月齢1～2カ月の子牛は母牛から離れ、牛舎で共同生活を送る／3.来月、再来月に出荷される子牛の牛舎。見た目は成牛のようにも見えるが、まだ月齢7～8カ月

関係の仕事を続けるべきか悩んだ。家の農家を継ごうにも、キャベツ農家はすでに廃業していた。しかし、幸いにも家には父が飼っていた5頭の牛がいた。当時32歳、5頭の牛から繁殖農家としてのスタートを切った。

それからは、国や県の補助事業をうまく活用しながら、牛の頭数や牛舎を増やし、経営規模を拡大していった。品評会用に父が良い牛の系統を買い揃えていたこと、キャベツを作っていた土地に牧草を植え自給飼料率90％であること、米を作る田んぼがありワラも手に入ることも功を奏した。

ICTを積極活用し哺乳や分娩をサポート

矢方牧場では、子牛の首に巻かれたバンドのセンサーで個体毎の哺乳量を把握し、哺乳ロボットでミルクの量や回数を管理するなど、ICT（情報通信技術）を積極的に導入している。

ICT機器の中でも、分娩センサーは画期的だった。ほんの5～6年前まで母牛の出産は夜寝ずに立ち会っていたと言う。「子牛が産まれるのは夜中か明け方。昼の12時頃に分娩が始まり、夜中の3時頃に産まれることもあります。特に初産は子牛が死産になることも多く、介助が必要なことが多いです」今は分娩センサーのおかげで、事前にスマートフォンに通知がくる。「おかげ様で分娩事故が減り、私たちも夜眠れるようになりました」

ICTの普及で以前より管理は楽になったとはいえ、生きもの相手なので人間の思い通りにはいかない。獣医さんも24時間、全ての農家をみることはできないから、分娩もほぼ自分たちで行う。「近所の繁殖農家から難産で人手が足りないから手伝って欲しいと深夜に電話がかかってくることもあります。母牛が元気な子牛を産んでくれるとほっとします」

子牛のセリ価格が暴落黒毛和牛を食べて応援

昨今、繁殖農家の頭を悩ましているのが、子牛のセリ価格が下落していることだ。理由はエネルギー価格の高騰や飼料価格の高止まりで、牛を育てる期間が長い肥育農家が高騰を直に受け、子牛を低い価格で競り落とすことが一因だ。

「繁殖農家でも飼料代の高騰はネックになる。ウチは牧草やワラの自給飼料率が90％だからなんとかやっていける。飼料を自給できない農家や、これから新規就農する人は大変だと思います」

いち消費者として何か応援できることはないだろうか。

「黒毛和牛を食べてもらうことが一番の応援になります。大分県九重町の小学校では毎月1回、学校給食に豊後牛のメニューを取り入れています。また、2023年度の新しい取組みとして、子ども食堂に豊後牛の丼を提供しました。小さな頃から食べてもらっておいしさを伝えることを目的としています」

母牛はなるべく放牧して足腰を鍛える。元気が良すぎて近くの牧場に脱走することもあるとか

玖珠町に子牛生産拠点 キャトルステーション誕生

2024年3月、大分県玖珠町に「JAおおいた玖珠郡キャトルステーション(以下、CS)」が誕生した。大分県では竹田市に次ぐ2番目の施設だ。

「CSは4~5カ月齢の子牛を農家から預かりセリ市に出荷するまでを管理する施設です。農家は子牛を預けて浮いた労働力と牛舎スペースで母牛を多く育てることができ、メリットが大きいです」

矢方牧場では3人姉妹の次女夫妻が後継者。孫も農業高校を今春卒業し、4月から大分県畜産研修センターで1年間研修を受け、将来は矢方牧場で働きたいと言う。将来有望な後継者もいて、牧場経営もひと安心と思いきや…。「昔だったら家族はタダ働き要員でしたが、今は給料を渡さないと。従業員が一人増えたら母牛を増やさなければいけないかも…」なんとも嬉しい悩みである。

矢方さんが仕事をしていて嬉しいのは、自分の牧場の子牛を肥育農家から褒められた時だと言う。「みなさんにもっとおおいた豊後牛を食べてもらって、そのおいしさを広めたいです。愛情を込めて育てていることを知っていただけたらと思います」

お二人にお話を伺いました。

右)大分県西部振興局 生産流通部 畜産班　繁田(しげた) 政豊(まさとよ)さん

左)矢方牧場　矢方盛士さん

通販はコチラ「おおいた豊後牛」で検索

■JAタウンHP
https://www.ja-town.com/shop/f/f0

編集部MEMO

繁田さんには「おおいた豊後牛」の全般的なこと、矢方さんには自身の牧場のことについて重点的に話を伺った。最後に、「おおいた豊後牛」はどこで購入できるかを尋ねたところ「大分県内のAコープ。それから道の駅 中津の精肉店は肥育農家さん直営なので良い品質のお肉がリーズナブルに購入できておススメです」とのこと。ふるさと納税の活用など、生産者応援の気持ちも込めて、九州のブランド牛を食べる機会を増やしたいものだ。